

説教 「異邦人の救い」

(詩編 102 編 16-23 節 マタイによる福音書 8 章 5-13 節)

2021 年 7 月 18 日

日本基督教団仙川教会

大串 肇 牧師

カファルナウムという町はイエスのガリラヤ宣教の中心地です。そこにローマ軍の百人隊長(ἐκατόνταρχος)がやってまいりまして、イエスに懇願しました。彼は、異邦人と呼ばれていた外国人でした。彼「の僕」が全身麻痺した状態で「ひどく苦しんで」いたというのです。この「僕」と訳された原語(παῖς)は使用人という意味のほか、一般的には少年とか、娘や息子、子供という意味なので、彼自身の息子ではないか、と考えられています。百人隊長は自分の側近や部下ではなく、自分の息子の重篤な病を心配してイエスのところに来たと考えるほうが自然かもしれません。彼は無名です。しかし異邦人でありながら、国境を守るローマ軍の精鋭部隊の隊長という身分の人です。その人物がイエスのもとに個人的なこととはいえ願い事で来ること自体尋常では考えられません。さらに「主よ」とイエスに呼び掛けている点は注目に値します。彼は自分の息子の病気を癒していただきたいという一心でイエスに懇願しました。「主よ」という呼称は単なる儀礼的な敬称ではなく、この異邦人の信仰が既にここに言い表されていると言えるでしょう。

そこでイエスはこう答えました。「わたしが行って、いやしてあげよう(θεραπεύω)」(7 節)。これは当時のユダヤ人にとっては驚きの発言です。というのは、ユダヤ人は異邦人と付き合うことは全くなかった。まして個人の家を互いに行き来するなど考えられないことでした。百人隊長もこのことを十分知っていたはずで、そこで百人隊長はイエスの申し出を断るのです。「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません」(8 節)。しかし彼は次のように願いました。「ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。9 わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」(8-9 節)

注目すべきことに、ここで百人隊長は再びイエスを「主」と呼んでいます。自分はローマの権威から授かっている。しかしイエスは神の権威によって悪を追い出し、人々をお救いになるお方であると信じていたのです。つまり、メシ

アであると信じたのです。ですから、イエスを「主」であると心から告白しているのです。ですから、メシアの語られるみ言葉で充分であると述べたのです。わたしたちが礼拝で聖書のみ言葉を聞くと同じように、主の語られるみ言葉に救いの御力があるのです。

そこでイエスは百人隊長の信仰を称賛され、「イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」と語られました (10 節)。藁をもすがる思いでイエスの下にきた人を、イエスは外国人だからと言って拒否しませんでした。たとえ彼が異邦人であっても、イエスはその求める思いを信仰として受け入れてくださったのです。そして最後にイエスは人々にこう語りました。

「言うておくが、いつか、東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラム、イサク、ヤコブと共に宴会の席に着く。12 だが、御国の子らは、外の暗闇に追い出される。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」 (11-12 節)

ユダヤ人たちはイエスを拒否しました。しかしやがて大勢の異邦人たちはイエスを信じるようになると語られました。イエスを信じ、従う者にはやがて来るべき神の国に入る約束を述べました。こうしてイエスの十字架の死と復活の後、キリスト教会に集うようになりました。しかし本来「御国の子」であるはずのユダヤ人たちはイエスをかたくなに拒否し続けた結果、国は滅んでしまったのです。首都エルサレムは完全に崩壊してしまいました。イエスの言葉はその事実を指示しています。

「そして、百人隊長に言われた。『帰りなさい。あなたが信じたとおりになるように。』ちょうどそのとき、僕の病気はいやされた。」 (13 節)

こうして百人隊長の願いは聞き届けられ、息子は癒されました。これは癒しの奇跡です。しかし、百人隊長は奇跡が起きたから信じたのではなく、信じた結果奇跡は起きたのです。マタイ福音書にとって信仰とは祈りと同じです。イエスが「信じたとおりになるように」と言われた通りです。この「なりますように」という言葉はあの「主の祈り」にも用いられている言葉 (γίνομαι) と同じです。自分ではなく、神の「御心がなりますように」(マタイ 6:10)。わたしたちの人生は 100 パーセント願った通りうまくいかないかもしれません。しかし主は「わたしが行って、いやしてあげよう」と語り、わたしたちと共にいてくださるのです。祈りは既に聞かれているのです。

祈りは神に対するわたしたちの願いや要求の押し付けではなく、信仰は試練や困難の最中にありましてもすべてを善いことへ導いてくださる神のみ心にゆだねて生きることを願うことだからです。「御心がなりますように」。まさにわたしたちは礼拝で語られている主のみ言葉によって癒され、神に祈り、すべてを神にゆだねて歩んでいきたいのです。神を信じて生きる者はすべて神のみ国に入れられるのです。お祈りいたしましょう。